

シナリオ 4

京子が働くスーパー 地震直後



スーパーに勤める京子

【場面設定】

京子は、自宅から自転車で10分程度のスーパーにパートで勤めている。2年前に夫をガンで亡くしてから、生活は苦しいが、なんとか生命保険金とパート収入で一人娘の恵美を大学まで進学させることができた。

その日の昼休み、休憩室の食堂で、他のパート2～3人と椅子に座り休憩中のときだった、急に建物がグラグラッと揺れ、悲鳴とともに誰かが、「地震や」と叫んだ。



間断ない揺れと大きな音が襲いかかり、京子は、ただひたすら目を閉じてテーブルにしがみついていた。

しばらくすると揺れがおさまり、おそるおそる目を開けると、休憩室にあった商品やテレビ、調度品は散乱し、窓ガラスは割れて足の踏み場もない状態になっている。

幸い、京子たちには、大きな怪我はなかったが、店内とお客さんがどうなっているだろうと思い、休憩室から店内に向かった。

店内に入ると、予想していたとおり、商品棚は転倒し、商品類は飛び散り、ビン類は床に落ちて、割れたガラスや中身の液体が散乱していた。まだ、うずくまっているお客さんもいる。

店長が、「余震がくると危険です、とりあえず店内から外の駐車場へ避難してください。」とお客さんに呼びかけていた。

何人かのお客さんが、割れたガラスなどで軽い怪我を負っているようだが、119番も通じない状態らしいと、同僚が話していた。

京子は、持っていた携帯電話から娘の恵美の携帯電話へ連絡を入れてみたが通じなかった。恵美は、今日は神戸へ行っているはずだ。神戸は姫路よりもひどいのだろうか。そして、家には、家族同然のトイプードルのリリーがいる。不安が波のように押し寄せてきた。

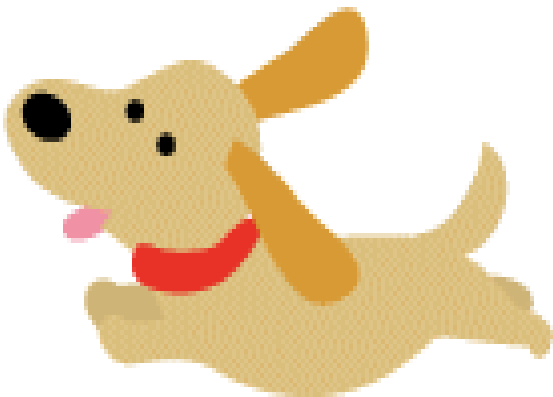


京子たちパート職員も集められて、「お客さんが怪我をされていないか、手分けして確認をしてくれ」、また、「軽い切り傷くらいなら救急箱の薬や包帯等で応急処置をしてくれ」と店長から指示をだされた。

しかし京子たちは、「自分たちはパートですし、家族や自宅のことが心配なので帰宅したいんです。」と店長に申し出て、もう少し手伝ってほしいという店長の頼みを振り切って帰宅の途についた。

普段は自転車通勤の京子だが、道路には大きな段差ができており、また古い家屋やブロック塀、自動販売機などが倒壊し、道をふさいでいたため、徒歩で自宅に向かった。

その間、倒壊した家屋の近くで、見知らぬ主婦から「この家には、まだ子供が取り残されているんです。手伝ってください。」と泣きながら頼まれた。なんとかしてあげたいという気持ちはあるものの、そんな力仕事に自信がないことと、いったい自分の家は、どうなっているんだろうという恐怖が大きくなり、「ごめんなさい、ごめんなさい。」と目をふせたまま通り過ぎた。



不安に押しつぶされそうになりながら、40分ほどかけて、ようやく自宅にたどりついた。幸いに自宅は倒壊はしていなかったが、玄関を開けようとすると、地震の影響か、なかなか玄関ドアが開かない。なんとかこじあけて、ようやく家の中に入ると、リリーがキャンキャンと鳴きながら、京子の腕に飛び込んできた。「ああ、よかった。」リリーの無事には、とりあえず安心したが、玄関や室内にあった下駄箱、タンス、食器棚が倒れ、中にあったものが床に落ち、食器、ガラス類が割れて飛び散っていた。

そのとき、また、余震と思われる大きな揺れがあり、家の中にいることにも恐怖を感じ、余震が収まるのを待って、リリーを抱いて家の外にでた。

【議論のポイント】

- ・京子は、スーパーで店長の頼みにこたえるべきだったでしょうか。
- ・帰宅時、助けを求められた京子はどのように対応すべきだったでしょう。
- ・自分が、主人公（京子）になったつもりで、状況をイメージし、その行動や避難場所到着まで、起こりうることや気をつけるべきことを考えてみましょう。

シナリオ 4 続編

京子が働くスーパー ～避難所到着まで

【行動シミュレーション】

ふと、自宅のまわりに目をやると、まわりの家からは、人の声がしないことに気がついた

京子は、ご近所はどうしたのだろうかと心細くなり、どうしたらいいんだろうと不安につつまれていた。

しばらく、家の近所を歩いていると30メートル程先に、人影を見つけた。急いでそばに走って行くと、隣保長の青木さんと自治会の役員さんであった。

青木さんに、「ご無事でしたか？」と声を掛けられた。



「地震後、自宅が心配で、急いでパート先から帰ってきたところです。ご近所の方の姿が見えないので、みなさん、ご無事なのか、不安で、不安で仕方がなかったんです。」と話した。

「ご近所のお家にいた方は、みなさん、**一時避難場所**になっている**緑山公園**にいったん避難されました。」

「そうなんですか。みなさんご無事なんですね」

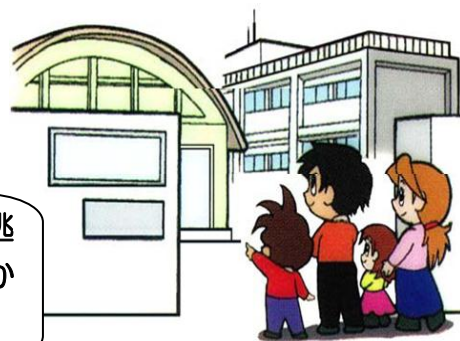
「まだ確認がとれていない方もいらっしゃると思いますが、おおむねご無事ようです。その後、**緑山小学校に避難所**が開設されましたので、みなさんは、自主防災会の方と一緒に、学校に向かわれました。」

「私は、自治会役員の方たちと**一時避難場所**に避難されていなかった、京子さん宅と高岡さん宅の

一時避難場所は、各自主防災会が近くの公園や集会所等を指定しています。

地震などの災害時では、小学校・中学校等が避難所となります。

一時避難場所では、逃げ遅れた方がいないか確認しましょう。



確認と、他に逃げ遅れた方がいないか、手分けし、1軒ずつ回って、確認しているところです。」

「ところで、京子さんのご家族はご無事ですか？」と訪ねられた。

「娘の恵美は、神戸に出かけて、連絡がとれないんです。」

「そうですか。それは心配ですね。でも、もう少し時間がたつと携帯も通じるようになると思うので、しばらく待ちましょう。」

「あっ、それと家に帰ってくる途中、倒壊した建物の前で、主婦の方に、『家の中に子供が中に閉じ込められている。』と助けを求められたんです。」

でも、私には、どうすることもできないので、帰ってきてしまったんです。」そばにいた、自治会役員の方が、「すぐに消防団へ連絡し、救助のお願いをしましょう。」と言った。「それでは、私が、消防団の方へ連絡に行きますので、詳しい場所教えてください。」

京子は、帰ってきた道を思い出しながら、説明をした。そして、罪悪感にも似た心のつかえが取れて、少しは明るい気持ちになった。

青木は、「私は、地域の被害状況がわからないので、このまま、自分たちの地域に住んでいる方が、逃げ遅れなどないか、確認を続けます。」と自治会役員と別れた。



京子は、恵美のことも心配であったが、今のところ、連絡も取れないのでとりあえず、愛犬リリーと避難所に向かうことに決めた。

青木は、避難する場合の心得えとして、電気のブレーカーを必ず落とすことと、また、**家族への連絡方法として、玄関などに避難先や連絡先を書いた紙等を貼っておくこと。食べ物を持っていくことなどのアドバイス**をくれた。

避難所に行く際は、最低限の食べ物、飲み物は持参しましょう。